

Ⅱ 平成 30 年度の特筆すべき取組／令和元年度の計画

【平成 30 年度実績】

1. (2つ目の国際コースのキックオフイベント)東北大学 SDGs シンポジウム「持続可能な開発目標(SDGs)の達成とグローバル人材」の開催

No.22 ②-1 経済・社会的課題に応える戦略的研究の推進

No.25 ③-1 新たな研究フロンティアの開拓

No.35 ②-1 社会連携活動の全学的推進

実績報告

本研究科2つ目の国際コースとして「グローバルガバナンスと持続可能な開発」プログラムを2019年4月に立ち上げるにあたり、キックオフイベントとして、総長裁量経費の補助をうけ2018年12月21日、河野太郎外務大臣、国谷裕子氏、末吉竹二郎氏、今村文彦教授を基調講演者に迎え「持続可能な開発目標(SDGs)の達成とグローバル人材」と題する大規模なシンポジウムを開催した。上記プログラムが中心となり、東北大学およびMS&ADインシュアランスグループホールディングス株式会社との共催によって実現した。

主たる成果は以下の通りであった。

- (1) 611名の出席者があり、そのうちほぼ9割が外部からの参加であった。
- (2) 出席者へのアンケート調査では、回答者(250名)の74%が「とても有意義だった」、22.4%が「やや有意義だった」と回答しており、高い評価を受けた。
- (3) 様々なセクター(企業、公共団体、市民、学校)に国連の提唱する「持続可能な開発目標(SDGs)」に本学が「東北大学版SDGs」の名のもと取り組んでいることを強くアピールした。
- (4) 討論を通して、SDGs関連の研究・人材養成において企業や公共団体から大学への期待が大きいことがわかった。
- (5) 高校関係者(教員と生徒27名)の参加があり、SDGsは高大接続という観点からも注目度が高いことがわかった。
- (6) 共催企業から上記プログラムに寄付講義を提供してもらうことになり、本研究科の産学連携活動の推進に貢献した。

 25_国文研_総務_東北大学 SDGs シンポジウムチラシ.pdf

東北大学 SDGs シンポジウム

持続可能な開発目標 (SDGs) の達成とグローバル人材



持続可能な開発目標 (SDGs) の達成に向けて、グローバル人材の育成という観点から、日本として、政府として、あるいは大学、地域、企業、市民として何ができるか、とりわけ、東日本大震災など災害の経験も踏まえ、世界にどのような発信ができるか、産学官地域のそれぞれの立場から議論します。

基調講演

- 河野 太郎 外務大臣、衆議院議員
- 国谷 裕子 キャスター、東京藝術大学理事 / 慶応義塾大学特任教授
- 今村 文彦 東北大学災害科学国際研究所所長・教授
- 末吉 竹二郎 国連環境計画・金融イニシアチブ (UNEP FI) 特別顧問、公益財団法人自然エネルギー財団副理事長

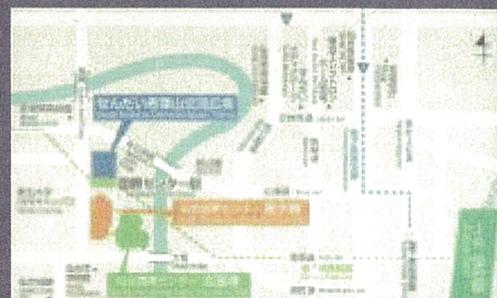
パネルディスカッション

- 須藤 勝義 国際協力機構 (JICA 東北) 所長
- 渥美 巖 宮城県東松島市長
- 辰野 まどか 一般社団法人グローバル教育推進プロジェクト (GIFT) 代表理事
- 藤井 史朗 MS&AD インシュアランスグループホールディングス株式会社取締役副社長執行役員 グループ CFO
- 劉 庭秀 東北大学大学院国際文化研究科教授

2018年 **12/21** 金
13:00~17:30 (受付開始 12:30)
参加無料・定員 700名

仙台国際センター・桜

仙台市営地下鉄東西線「国際センター駅」徒歩1分



主催：東北大学、東北大学大学院国際文化研究科

共催：MS&AD インシュアランスグループホールディングス株式会社、東北大学災害科学国際研究所

後援：内閣府地方創生推進室、外務省、文部科学省、環境省、東北経済産業局、宮城県、仙台市、東松島市、国際協力機構、河北新報、MS&AD インターリスク総研

持続可能な開発目標 (SDGs) とは？

2015年9月の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」に基づく、2016年から2030年までの国際目標です。持続可能な世界を実現するための17のゴール・169のターゲットから構成され、地球上の誰一人として取り残さない (leave no one behind) ことを誓っています。SDGsは発展途上国のみならず、先進国自身が取り組むものであり、日本の政府や企業も積極的に取り組んでいます。

プログラム

主催者挨拶

大野 英男 東北大学総長

基調講演

河野 太郎 外務大臣、衆議院議員

国谷 裕子 キャスター、東京藝術大学理事 / 慶応義塾大学特任教授

今村 文彦 東北大学災害科学国際研究所所長・教授

末吉 竹二郎 国連環境計画・金融イニシアチブ (UNEP FI) 特別顧問、公益財団法人自然エネルギー財団副理事長

パネルディスカッション

須藤 勝義 国際協力機構 (JICA 東北) 所長

渥美 巖 宮城県東松島市長

辰野 まどか 一般社団法人グローバル教育推進プロジェクト (GiFT) 代表理事

藤井 史朗 MS&AD インシュアランスグループ ホールディングス株式会社取締役副社長執行役員 グループ CFO

劉 庭秀 東北大学大学院国際文化研究科教授

閉会の挨拶

小野 尚之 東北大学大学院国際文化研究科長・教授

※ 講演者・講演内容・スケジュールは事前の予告なく変更となる場合がございます。あらかじめご了承ください。

本シンポジウムについて

東北大学大学院国際文化研究科では、持続可能な開発に向けた人材育成や知の創出に資するため、2019年度より、新たに「グローバルガバナンスと持続可能な開発プログラム (G2SD)」を開講するとともに、MS&AD インシュアランスグループホールディングス株式会社より寄付金を受け、寄付講義の開講を予定しています。本シンポジウムは、これを記念して開催するものです。

G2SD Graduate Program in Global Governance & Sustainable Development

グローバルガバナンスと持続可能な開発プログラム (G2SD) は、東北大学大学院国際文化研究科が提供する新しい学際プログラムです。グローバルガバナンスと持続可能な開発という相互に関連した人類の共通課題に立ち向かう能力を、批判的な理論検証と問題解決型の研究を通じて育成します。

<http://www.intcul.tohoku.ac.jp/g2sd>

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

世界を変えるための17の目標



河野 太郎 こうの たろう
外務大臣、衆議院議員



国谷 裕子 くによ ひろこ

キャスター、東京藝術大学理事 / 慶応義塾大学特任教授
米ブラウン大学卒。NHK 衛星放送「ワールドニュース」のキャスターを経て、1993年から2016年までNHK「クロズアップ現代」キャスター。現在、SDGsの取材・啓発活動を行なっている。自然エネルギー財団理事、国連食糧農業機関親善大使も務めている。02年菊池寛賞、11年日本記者クラブ賞受賞。著書に「キャスターという仕事」(岩波新書)。



今村 文彦 いまむら ふみひこ

東北大学災害科学国際研究所所長・教授
東北大学大学院博士後期課程修了。同大学院工学研究科附属災害制御研究センター助教授、同教授を経て、2014年より現職。専門は津波工学・自然災害科学で、津波被害の軽減を目指し、津波予警報システムの開発や太平洋での防災対策等の研究を数多く実施。津波数値技術移転国際プロジェクト TIME の代表。中央防災会議専門調査会委員、東日本大震災復興構想会議検討部会等。主な受賞は、NHK放送文化賞 (平成26年)、文部科学大臣表彰 (科学技術振興部門、平成27年)。



末吉 竹二郎 すえよし たけじろう

国連環境計画・金融イニシアチブ (UNEP FI) 特別顧問、公益財団法人自然エネルギー財団副理事長
長年の金融界での経験をバックに「金融と地球環境問題」をテーマに、金融のあり方やCSR経営などについて、講演、講義、著書などで啓もうに努める。



須藤 勝義
国際協力機構 (JICA 東北) 所長



渥美 巖
宮城県東松島市長



辰野 まどか
一般社団法人グローバル教育推進プロジェクト (GiFT) 代表理事



藤井 史朗
MS&AD インシュアランスグループ
ホールディングス株式会社
取締役 副社長執行役員 グループ CFO



劉 庭秀
東北大学大学院
国際文化研究科教授

参加お申込み

<http://www.intcul.tohoku.ac.jp/g2sd/2018sdgs>

※ 定員に達し次第、お申込みを締め切らせて頂きます。

シンポジウム事務局

〒604-8141 京都市中京区泉正寺町 334
目昇ビル5階 CS センター内
TEL: 075-241-9620, FAX: 075-241-9692



2. (2つ目の国際コース及び災害科学・安全学国際共同大学院のプレセミナー)ドイツにおける難民・移民の社会統合に関する国際シンポジウム

No.22 ②-1 経済・社会的課題に応える戦略的研究の推進

No.46 ③-1 国際通用性の向上

実績報告

本研究科教員4名が参加し実施している科学研究費補助金基盤研究(B)「EUにおける難民の社会統合モデル—ドイツ・ハレ市の先進的試みの可能性と課題—」(代表：佐藤雪野)の研究チームが主催し、「ドイツ・ハレ市における難民・移民の社会統合—ヒューマン・セキュリティのために『教育』ができること—」と題する国際シンポジウムを2019年2月23日に開催した。シンポジウムでは、難民・移民問題が社会的にクローズアップされているドイツのハレ市からハレ=ヴィッテンベルク大学の3名の研究者を招き、同市では難民・移民の社会統合を目指してどのような取り組みを行い、どのような支援体制を構築しているかなどを、特に教育に重点をおいて講演していただいた。その際、日本の教育現場でも導入が始まった「インクルーシブ教育(社会的包摂教育)」という視点や難民・移民の社会統合における大学の役割などが事例を踏まえて論じられた。本シンポジウムでは、本年4月の在留資格の変更によって、急激により多くの外国人労働者を受け入れる予定の日本の社会、そして大学を含む教育諸機関の在り方を考えるうえで示唆に富む指摘が数多くなされた。

主たる成果は以下の通りであった。

(1) 講演は英語で行なわれたが、より幅広い層の参加者を期待し逐次通訳を付したことで、首都圏を含む複数の大学の研究者・学生(約25名)、高等学校の教員、一般市民、高校生(3校9名)を含む約40名の参加者があった。

(2) 共催者となっている本研究科「グローバルガバナンスと持続可能な開発」プログラムのみならず、2019年度に立ち上がる災害科学・安全学国際共同大学院プログラムのプレセミナーとしての役割を果たした。このシンポジウムから得られた知見(例えば、下記(4)など)を授業に還元し、現実的な社会問題の解決に貢献できる人材の育成を目指す。

(3) 本シンポジウムの成果を取り入れた科研費の補助を受けている研究の中間報告という形で、第35回日本ドイツ学会でフォーラムを開催する予定である(フォーラム「ドイツ・ハレ市における移民難民の社会統合—フィールドワーク中間報告」、2019年6月開催)。

(4) 3つの講演から外国人労働者の増加が見込まれる日本社会への示唆が得られた。例えば、ブレイマー氏は、難民や移民の児童生徒をゲストととらえてホスト社会に統合する「統合教育」ではなく、難民・移民の文化や言語の違いをジェンダーや各種の障がいなどと同様に様々な違いの一つと捉え、多様性を社会に包摂する「社会的包摂教育」として捉える考え方を披露した。日本でも数年前から文科省が「インクルーシヴ教育」という概念を提唱しているが、主に障がい者といわゆる健常者が共に学ぶことを想定している。日本も今後外国人労働者が増加する状況の中で、「インクルーシヴ教育」をさらに敷衍していくことの可能性について知見を得ることができた。

 [20190223-togo_haresi.jpg](#)



東北大学



GSICS
TOHOKU UNIVERSITY

G2SD Graduate Program in
Global Governance &
Sustainable Development

科研費プロジェクト・第1回国際シンポジウム

ドイツ・ハレ市における 難民・移民の社会統合

—ヒューマン・セキュリティのために「教育」ができること—

2015年夏以降、未曾有の難民がEU域内を目指すなか、ドイツでは、連邦政府がその受け入れを表明したが、ドイツ国内、特に旧東独地域での反難民・反移民の動向が注目された。しかし、同地域のハレ市では、難民の社会統合を目指した市当局、大学、初等・中等学校、宗教団体、NPO等を横断する支援体制の構築が進み、一定の効果を上げている。本シンポジウムでは、その一翼を担うハレ大学から3人の研究者を招聘し、将来の日本にも応用可能なハレ市の現状を検討する。

プログラム

1. 多様性の文化?
—ドイツ諸都市における日常的異文化交流を支える理論—
トーマス・ブレーマー ハレ=ヴィッテンベルク大学教員養成センター所長・教授
2. 2015年の難民・移民動向とハレ大学
—ハレ大学オリент研究所の対応と活動—
シュテファン・クノスト ハレ=ヴィッテンベルク大学学際地域研究センター特任講師
3. 難民・移民、地方自治体、教育
—2015年の難民・移民流入期におけるハレ市および学校の諸施策—
ペーター・グリェットナー ハレ=ヴィッテンベルク大学教員養成センター国際交流担当職員

(講演言語: 英語、日本語逐次通訳付)

日時

2019年2月23日(土)
13:00~17:10

会場

東北大学片平キャンパス
・片平さくらホール2階会議室

主催

科学研究費補助金 基盤研究(B)「EUにおける難民の社会統合モデル—ドイツ・ハレ市の先進的試みの可能性と課題—」チーム

共催

東北大学大学院国際文化研究科(「グローバルガバナンスと持続可能な開発」プログラム)/東北大学災害科学・安全学国際共同大学院プログラム・プレセミナー

H30実績(7/15)

問い合わせ先

halle_sympo@yahoo.co.jp

アクセス

- 仙台市地下鉄 東西線
「青葉通一番町駅」
南1出口より
徒歩 約10分
- 仙台市地下鉄 南北線
「五橋駅」
北2・北4口より
徒歩約7分



3. 国際学術交流を推進する日本学国際学術会議の開催

No.25 ③-1 新たな研究フロンティアの開拓

実績報告

国際文化研究科は、日本学国際共同大学院の事業の一環として、文学研究科、法学研究科、経済学研究科、教育学研究科、東北アジア研究センターと連携し、2018年12月14日～16日、「明治維新再考：文化、歴史、国家」を全体テーマとする日本学国際会議 The First Tohoku Conference on Global Japanese Studies を主催した。この学術会議では、シカゴ大学ジェームズ・ケテラー教授、及び金城学院大学桐原健真教授が基調講演者として登壇し、ヨーロッパ、北米、アジア各国から参加した20名以上の著名な研究者が日本学の各領域における種々の研究報告を行った。本事業は、国際的な日本学の研究交流活動を通して国際共同大学院の研究を国際水準に高め、本学における日本学の国際プレゼンスを向上させることが狙いであった。

主たる成果は以下の通りであった。

- (1) 全体で40名程の出席者があった。
- (2) ヨーロッパからはハイデルベルク大学(3名)、ライデン大学、イースト・アングリア大学、シェフイールド大学、マドリード大学(各1名)から出席者があった。特にハイデルベルク大学は共同大学院学生の派遣先となる可能性の高い提携先であり、連携の確認をすることができた。
- (3) 北米からは、シカゴ大学(1名)、ミシガン大学(2名)、アマーست・カレッジ(1名)から出席者があった。特にシカゴ大学から日本研究において世界的に著名なケテラー教授を基調講演者として招待することができた。シカゴ大学とは今後、本研究科が独自に日本学研究において連携していくことを計画しており、その端緒となった。
- (4) アジアからは中国(2名)、台湾(1名)、韓国(2名)、タイ(1名)、マレーシア(1名)から出席者があった。このうちタイのタマサート大学とは本研究科が独自に日本学研究において連携していくことを計画しており、これまでの研究者間の交流を一段高いレベル(部局間学術交流協定)に上げることの検討を開始する機会となった。
- (5) 上記の世界各地からの日本学研究者に、本学が日本学に焦点を当てる国際大学院プログラムを立ち上げることをアピールした。基調講演者のケテラー教授からは「このような先進的な取り組みは国際的に見ても価値があるので、今後の展開に大いに期待したい」という評価を得た。

 [26_国文研_総務_2018.12.14～16 日本学国際学術会議チラシ.pdf](#)

THE FIRST TOHOKU CONFERENCE ON GLOBAL JAPANESE STUDIES: "The Meiji Restoration Revisited: Culture, Religion, and the State"

Conference Dates and Venue

Dec. 14-16, 2018,
Multidisciplinary Research Bldg. (文科系総合講義棟)
Tohoku University, Kawauchi Minami Campus,
Sendai, Japan

Keynote Speakers

Prof. James E. Ketelaar
(The University of Chicago)
Prof. Kenshin Kirihara
(Kinjo Gakuin University)

Description

The Meiji Restoration of 1868 has been studied primarily from a political perspective. But this major event also made new forms of knowledge, thinking, and representation widely available, and brought new religious, cultural, and linguistic transformations, changing once and for all the way the inhabitants of the Japanese islands understood themselves in a global context. These changes of 1868 also brought wide-ranging effects in Asia and the rest of the world. On the occasion of the 150th anniversary of the Meiji Restoration, this conference aims to reconsider the Meiji Restoration from a cultural perspective, and to think about the intersections between on the one hand cultural and religious changes, and political and legal on the other, while trying to find its place in the overall context of global history.



THE FIRST TOHOKU CONFERENCE
ON GLOBAL JAPANESE STUDIES:

"The Meiji Restoration Revisited: Culture, Religion, and the State"

Program

Dec. 14 (Fri)		法学部第1講義室	
16:30 - 16:40	Opening Remarks		
16:40 - 18:00	KEYNOTE 1 (英語) James E. KETELAAR (University of Chicago) Title: Phallicism, Religionswissenschaft, and the Rise of "Meiji Religion" as Museum		
18:30	Opening Reception		
Dec. 15 (Sat)		第一部会 (法学部第1小講義室)	第二部会 (経済学部第2小講義室)
9:00	Coffee		
10:00 - 11:45	CHINA AND THE MEIJI WORLD (英語) Pär CASSEL (University of Michigan) Egas MONIZ-BANDEIRA (Univ. of Heidelberg) ZHONG Yijiang (The University of Tokyo)	LANGUAGE AND AESTHETICS (英語) ターライベクムサエフ (マラヤ大学) フリントン・ウーウォン (タマサート大学) 郭城 (東北大学)	
13:00 - 14:45	ART IN THE MEIJI PERIOD (英語) Chelsea FOXWELL (University of Chicago) Micah L. AUERBACK (Univ. of Michigan) Daniel SASTRE (Autonomous Univ. of Madrid)	JAPANESE SOCIETY AND ITS CHALLENGES (英語) Hans BATSCHECK (Tohoku University) Johannes HOCHREUTHER (Univ. of Heidelberg) Jing WANG (University of Sheffield) Ra MASON (University of East Anglia)	
15:00 - 16:45	TIME AND NARRATIVE (英語) OKADA Masahiko (Tenri University) SASAKI Shunsuke (Tohoku University) Aafke VAN EWIIK (Leiden University)	LAW AND STATE IN EASTERN INTELLECT. HIST. (日英両語) GE Amy (Tohoku University) QI Tonghui (Southwest Univ. of Polit. Science and Law) WU Haojen (Fu Jen Catholic University)	
17:10 - 18:30	KEYNOTE2 (日本語) 法学部第1講義室 KIRIHARA Kenshin 桐原健真 (Kinjo Gakuin University) Title: 「尊王攘夷」とは何だったのか?— 言説的考察 (What did Sonnō Jōi Mean?: A Discursive Approach)		
Dec. 16 (Sun)		第一部会 (法学部第1小講義室)	第二部会 (経済学部第2小講義室)
9:00	Coffee		
9:45 - 11:45	RELIGION (英語) HOSHINO Seiji (Kokugakuin University) Bruce GROVER (University of Heidelberg) WU Peiyao (Tohoku University) RESPONSE: Trent MAXEY (Amherst College)	MODERNIZATION AND COLONIALISM (日本語) 劉軒 (南開大学) 崔金柱 (首都師範大学) 徐禎完 (翰林大学) 唐利国 (北京大学)	
12:00 - 13:00	General Discussion (Presiding: James E. KETELAAR and KIRIHARA Kenshin)		
14:30 - 18:00	Excursion in Sendai City		

4. (全学教育における英語教育改革への貢献)英語教育改革推進ワーキンググループにおける取り組み

No.01 ①-1 現代的課題に挑戦する基盤となる先端的・創造的な高度教養教育の確立・展開

実績報告

本学の全学教育の改革に向けた取り組みの一環である英語教育改革推進ワーキンググループに本研究科から3名の全学教育英語担当教員が参画した。特に、2019年2月13日には本研究科が共催として関わり、本研究科教員が企画・実施を担当した「東北大学英語教育改革に向けて-到達目標と高大接続-」という表題のFDを実施した。これにはTOEFLを実施・運営するEducational Testing Service (ETS) のExecutive DirectorであるSrikant Gopal氏と日本のTOEFL事務局であるCIEE(国際教育交換協議会)の根本齊氏に講演いただいた。

主たる成果は以下の通りである。

- (1) 本学の全学教育における英語教育にTOEFLを活用し、より国際通用性のあるものとする取り組みに貢献するものである。
- (2) この取り組みにより、2019年度から本学教員がETSでの研修(ETS Global Institute 2019 Course)に参加することになった。
- (3) FDには45名(学外者12名、非常勤講師4名を含む)の参加者があった。TOEFLが測ろうとしている能力、TOEFLを大学の英語教育に組み入れることの妥当性について知識を共有する場となった。

 [資料 4_H30 英語教育 FD20190213.pdf](#)

平成30年度 英語教育改革推進FD

東北大学英語教育改革に向けて―到達目標と高大接続―

日時：平成31年 **2月13日** (水) 13:30-16:30

会場：東北大学川内北キャンパス 講義棟 B 棟 B203 教室

学務審議会に平成30年11月に設立された英語教育改革促進ワーキング・グループの事業の一環として、学士教育における英語教育の、時代にマッチした制度改革と抜本的な内容改善を目指すために、本学英語授業担当の全教職員向けにFDを開催し、幅広い情報の共有と今後の具体的方略に向けての意見を交換する。

Program

[開会挨拶] 山口 昌弘 (東北大学副学長 学務審議会外国語委員会委員長)

【第Ⅰ部】 TOEFL® test とその活用について

講演1 Mr. Srikant Gopal (Educational Testing Service (ETS) Executive Director)

講演2 根本 斉 氏 (CIEE (国際教育交換協議会) 事業統括本部長)

[質疑応答]

【第Ⅱ部】 学習指導要領の理解 (高大接続のために)

講演3 秦野 進一 氏 (東北大学高度教養教育・学生支援機構 入試センター 特任教授)

[質疑応答・全体討論]

[総司会] 岡田 毅 (国際文化研究科教授)

【対象】

学部・大学院を問わず東北大学で英語に関する業務(入試・授業等)に携わるすべての教員(専任教員および非常勤教員)・事務職員、関心を持つ近隣教育機関の教員および学生

参加申し込み方法
REGISTRATION

【参加無料】

東北大学高度教養教育・学生支援機構 HP「イベント申込み」より Webにてお申込みください。

※Web申込み不可の場合は、氏名・所属・連絡先(e-mail)を明記の上、iehe-seminar@g-mail.tohoku-university.jp までお申込みください。

<http://www.ihe.tohoku.ac.jp/>

東北大学高度教養教育・学生支援機構

検索

お問い合わせ先
CONTACT

東北大学 高度教養教育・学生支援機構 運営サポート室
E-mail: ieheoffice@ihe.tohoku.ac.jp Tel: 022-795-7551
H30実績(12/15)

主催：東北大学学務審議会外国語委員会
共催：東北大学高度教養教育・学生支援機構
東北大学大学院国際文化研究科

5. グローバル化に対応した新たな教育カリキュラムの構築

No.01 ①-1 現代的課題に挑戦する基盤となる先端的・創造的な高度教養教育の確立・展開

No.03 ②-2 大学院教育の充実

No.43 ②-1 外国人留学生の戦略的受入れと修学環境の整備

実績報告

部局ビジョンの1つである「グローバル化に対応した新たな教育カリキュラムの構築」における取り組みとして、英語で実施する「研究のための倫理」科目を2019年度から開講するための準備を行った(実際に2019年度に開講予定である)。これは、従来から開講していた日本語を教授言語とする同名称科目に加え、英語を使用言語とする国際コースの拡充に合わせて、日本語が使用できない学生向けに研究倫理教育を提供するものであり、修士課程学生向けの現代で必要とされる基盤的教養教育を充実させるものである。

主たる成果は以下の通りである。

- (1) 英語を教授言語とする科目の充実に貢献した。
- (2) 従来、倫理科目のなかった英語コース学生により充実した基盤教育を提供できることとなった。

 [資料 5_20190507「研究のための倫理」.pdf](#)

シラバス参照

科目名/Subject	研究のための倫理(英語)
曜日・講時/Day/Period	後期集中 その他 連講
科目群/Categories	大学院専門科目-国際文化研究科専門科目(MC)
単位数/Credit(s)	2
担当教員/Instructor	担当教員
科目ナンバリング /Course Numbering	KIC-ETH501E
使用言語 /Language Used in Course	英語

授業題目 /Class Subject	Introduction to Research Ethics	
授業の 目的と概要 /Object and Summary of Class	We will present you an introduction to research ethics for graduate students. We take a standardized teaching protocol for understanding research ethics borrowed from Japanese text books by use of case discussion method	
学習の 到達目標 /Goal of Study	<ol style="list-style-type: none"> 1. Students can understand the philosophies and histories of modern research ethics by participating with case studies conferences. 2. Through considering on various cases of misconducts in research contexts the students can elaborate and understand about the meaning of "research integrity." 3. Students can write concrete research proposal with ethical concerns even though that students' plans would be virtual or planned in near future. 	
授業内容・ 目的・方法 /Contents and progress schedule of class	概要	—
授業内容・ 目的・方法 /Contents and progress schedule of class	<ol style="list-style-type: none"> 1. Introducing to Workshop Style Class, and The three axioms for the modern research ethics 2. Topic: A Change of Plans 3. Topic: The Selection of Data 4. Topic: Discovering an Error 5. Topic: Discovering an Error in the CFP 6. Topic: Is It Plagiarism? 7. Topic: A Career in the Balance 8. Topic: Tests on Students 9. Topic: A Change of Protocol 10. Topic: Publication Practices 11. Topic: Publication Practices 12. Topic: A Commercial Opportunity? 13. Topic: The Elemental Form of fieldworkers' Ethics 14. Topic: Animal experiment, experimental trial by using animals instead human object 15. Topic: A Conflict of Commitment 	
授業内容・ 目的・方法 /Contents and progress schedule of class	試験	Topic: Subjective Maxims for you, a scientist
成績評価 方法	Grading of qualification will be evaluated from self-evaluation points from each students' portfolios, 50%, and attainment points of student's	

/Evaluation Method reports, 50%

教科書
および
参考書

/Textbook
and
references

You can get and read hand-outs and assigned papers from web-site [<https://goo.gl/v5w8Hp>] chiefly in Japanese.

授業時間外
学習

/Preparation
and Review

We provide and arrange a resource web-page [<https://goo.gl/u8L6vq>] for students attending this class outside from this virtual syllabus. The Students can use this web-site for preparations and reviews of each class.

その他

/In addition